

# 看護基礎教育における臨床実習（各論）展開に関する一考察

## —学習要因からみた教育効果の検討—

若林敏子・小玉美智子

### I. はじめに

看護基礎教育において臨床実習が必要不可欠な学習形態であることの指摘はすでに多く論述で示されているところであり、その意義にあらがうものはないだろう。

そうした臨地での教育は、講義で学んだ知識、技術、態度を実践を通して統合化し、実践活動のできる基礎能力を身につけることである。すなわち、看護教育は実践の教育であり、教室での教育が生きてくるか否かは常に臨床の現場に教育力があるか否かで決定されると云っても過言ではない。臨床実習の意味について、杉森は、「坐学や演習で学ぶ思考過程の中でふくらんだ知識は理想の或を脱しない。したがって体験学習では理想と現実のギャップを認め、その中から課題が見い出されていくところに実践学として意義がある」<sup>1)</sup>と述べているように臨床での教育は重要な位置を占めている。

そうした、臨地での教育を効果的、かつ教育的に展開するための要因として、現場の教育力は勿論であるが、教育的意図のもとに計画された実習計画とともに学習内容が重要な要素であると考え。知識、技術を統合化するための学習として成果が最も端的に表われるものが看護過程の展開であろう。すなわち、看護過程は、看護ケアに順序と方向性をもたらす根底的な理論的概要であるとともに専門看護の実践の真髄でもあると云われており、現代の看護教育の中でも重要な位置を占め、臨床実習での教育ではこの看護過程の実践能力の育成に重点を置いた教育が主流をなしている。

本学においても臨床実習展開上の主軸をこの看護過程におき展開することを看護教員の統一見解を得て実施している。

さらに、臨床実習を効果的かつ教育的にと考え病棟実習前後に各2～2.5日間の学内実習を計画し実習への導入・まとめとして学習を実施している。

本稿は、各論実習、成人内科系、成人外科系、母性、小児看護（以下臨床実習という）を主に学内実習の有用性と臨床実習における学習の結果がどのような対応をなしているかについて学生の意識調査から学習要因につい

て分析し学習効果を検討した。なお調査内容については、藤原らの調査表を参考とした。

### II. 臨床実習の概要

本学における臨床実習の概要については、表1に示したように、主として各論実習、3年次の4月から12月までの期間に16単位、720時間を（老人看護実習については平成3年度までは選択のため除外した）50名の学生を25名づつ2分し主として総合病院の2施設に於いて（平成元年度より母性、小児看護実習の一部の学生（10名）のみ1施設増加）集中実習の形態で実施している。実習にあたっては、看護教員で構成している実習連絡会議において検討し作成した全体を総括する看護学実習実施要項にもとづき実習を展開している。

さらには、前掲したように各教科毎の病棟実習の前後に2～2.5日間の学内実習を計画しそれぞれ実習の導入、まとめとしての学習に運用している。

対象学生の实習計画を表1に、実習に関する履修状況を表2に示した。一方、各教科毎の授業目標は表3の通りである。

### III. 研究方法

#### 1. 調査対象及び方法

臨床実習全終了後の3年次生42名を対象に平成2年2月質問紙法で自記入による調査を行った。回収率100%

設問は病棟実習開始前の学内オリエンテーションにおける学習、病棟での学習内容、患者との関係学習、看護過程の実践学習について学生の満足度と学内オリエンテーション（以下学内オリという）の有用性について問うたものである。その他学内実習で強化してほしい学習内容、実習終了後のまとめでの効果的学習内容及び看護観について質問肢を設けた。それぞれA強肯定、B弱肯定、C弱否定、D強否定の4者択一で回答させた。なお、学内オリの有用性については、役に立ったか否かで回答させた。

表1 平成元年度(2・3年次生)看護実習年間計画表

岡山県立短期大学看護科

施設	学年	4月				5月				6月				7月～8月				9月				10月				11月				12月				1月				2月															
		日	5	10	17	24	1	8	15	22	29	6	13	20	27	3	10	17	24	28	4	11	18	25	2	9	16	23	30	6	13	20	27	4	11	18	25	1	8	15	22	29	5	12									
国立岡山病院・県立岡山病院	三年次生 24名	春 休 日	4	8	15	22	29	6	13	20	27	3	10	17	24	1	8	15	22	29	2	9	16	23	30	7	14	21	28	4	11	18	25	2	9	16	23	30	6	13	20	27	4	11	18	25	1	8	15	22	29	5	12
	春 休 日	4	8	15	22	29	6	13	20	27	3	10	17	24	1	8	15	22	29	2	9	16	23	30	7	14	21	28	4	11	18	25	2	9	16	23	30	6	13	20	27	4	11	18	25	1	8	15	22	29	5	12	
岡山赤十字病院・済生会病院・県立岡山病院	三年次生 24名	春 休 日	4	8	15	22	29	6	13	20	27	3	10	17	24	1	8	15	22	29	2	9	16	23	30	7	14	21	28	4	11	18	25	2	9	16	23	30	6	13	20	27	4	11	18	25	1	8	15	22	29	5	12
	春 休 日	4	8	15	22	29	6	13	20	27	3	10	17	24	1	8	15	22	29	2	9	16	23	30	7	14	21	28	4	11	18	25	2	9	16	23	30	6	13	20	27	4	11	18	25	1	8	15	22	29	5	12	
岡山赤十字病院・済生会病院・県立岡山病院	二年次生 25名	春 休 日	4	8	15	22	29	6	13	20	27	3	10	17	24	1	8	15	22	29	2	9	16	23	30	7	14	21	28	4	11	18	25	2	9	16	23	30	6	13	20	27	4	11	18	25	1	8	15	22	29	5	12
	春 休 日	4	8	15	22	29	6	13	20	27	3	10	17	24	1	8	15	22	29	2	9	16	23	30	7	14	21	28	4	11	18	25	2	9	16	23	30	6	13	20	27	4	11	18	25	1	8	15	22	29	5	12	

学内実習の運用

月	火	水	木	金	土
実習終了科の まとめ	講義	実習終了科の まとめ	次の実習科の導入		

#### Ⅳ. 調査結果及び考察

調査項目を病棟開始前オリエンテーション、病棟での学習内容、患者との関係学習、看護過程の実践、評価、検証に大別し、それぞれの回答を百分率で現わしたものが表4の通りである。

##### 1. 実習開始オリエンテーションについて

病棟実習の開始に先立って、学生全員を対象に実習全般に関するオリエンテーションを要項に基づいて行った後、各教科毎に実習展開に必要な事項について担当教員によりオリエンテーションが計画され実習への導入を図った。その結果をみてみるとほとんどの学習項目に肯定度が高く、学生の学習の満足度の高いことを示している。特に肯定したものの多い項目として「受持ち患者の疾病や看護について」が、88.1%、次いで「受持ち患者の観察法」83.3%、「受持ち患者の全体像について」69.1%

と受持ち患者に関する学習に肯定度が高くみられた。実習前オリエンテーションで受持ち患者の疾病や看護について説明を受けたり学習することは、実習に対する準備の必要性や効果的な実習展開のための予備的学習内容として重要な学習の一つである。また学生の実習への動機づけや実習に対する不安や緊張感の緩和につながる要素でもあると考える。一方看護計画に対する学習のうち、「情報の分析、問題点の抽出の方法について」は61.9%「看護計画の立案方法について」が69.0%、「看護の実施、結果の評価、検証の方法について」は45.2%と看護計画立案に関する学習に肯定度が低かった。

これらについては、学習過程において紙上での情報のみで、すなわちアセスメント段階で、その情報が実際に「生」の患者からの情報でないために、看護計画を立案するだけの情報が学生の頭の中に理解できなかったの

表2 実習に関する履修状況

授 業 科 目	一 年 次		二 年 次		三 年 次		備 考
	前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期	
看護実習	90	90					学内
総合実習			135				病院
内科系看護実習Ⅰ				45 45 45		45	学内 学内 学内 病院・保健所
内科系看護実習Ⅱ					180		病院（内科・精神科）
外科系看護実習Ⅰ				90	90		学内 病院
外科系看護実習Ⅱ				90	225		学内 病院（外科・整形・婦人科）
老人看護実習Ⅰ		45	45				学内・特養
老人看護実習Ⅱ					90		施設・地域
小児看護実習Ⅰ				45			学内
小児看護実習Ⅱ					135		病院・保育園
母性看護実習Ⅰ				45			学内
母性看護実習Ⅱ					135		病院

表3 臨床実習各科授業目標

	授 業 目 標
内科	内科的治療を受けている成人期の患者に対し、適切な看護ができるよう基礎的能力を身につける
精神科	現在の精神科医療の概要と病院 治療の中での看護業務ならびにその役割を理解する
外科	1) 手術を受ける患者および手術を受けた患者に対し、看護の必要性を認識し適切な看護を行なう 2) 外科・整形外科病棟の特殊性を学び、その中での看護のあり方を考える
婦人科	婦人科的諸問題を持った患者を理解し、実践活動を通して婦人科看護に必要な知識・技術を実習する
母性	1) 妊娠・分娩・産褥および新生児の生理的経過を理解し、母性の特徴を捉える 2) 実践を通して、妊娠・分娩・産褥および新生児に必要な看護と保健指導を習得する
小児	1) 小児の成長・発達を体験的に理解し、子供の特性を把握する。 2) 基本的な生活の援助を実践するとともに、診療上必要な看護方法を学ぶ 3) 実践を通して、望ましい児童観を養うとともに、小児医療、小児看護のあり方を考える
老人	1) 地域における老人の保健活動・福祉活動の実際学び老人の生活がどのように守られているかを知る 2) 生活の場における老人看護の必要性と問題点を実践活動を通して学ぶ 3) 望ましい老人観を養う

はないかと思う。いわゆる、学生は看護の対象である患者をイメージ化することに困難を示し、そのために情報の分析、結果問題の抽出、実施、評価までという一連の看護計画の立案が自分の頭の中で理解できていなかったために、肯定度が低く現われたのではないかと考える。

看護上看護計画の立案は必要不可欠であり学生が実習前に予備学習として学習することは、現場での実習を効果的に展開させることで有効な学習内容であるが、しかし、学習過程においてそこに直接反応を示す患者が存在し、直接かわって初めて学生は現実として、その事象を情報として捉えてそれを分析し、問題点を抽出して、実践活動へと結びつけていって初めてその過程を理解できる。しかし、学内オリでそのような環境を設定することは困難であり、そうかといって、学生が何ら事前準備なしにベットサイドに臨むことは許されないことである。学習により理解を深めるために学内でのオリエンテーションをできるだけそれに近づけた環境に整えるべき努力が必要であると考え。そして学内でのオリエンテーションが、学生が看護実習への方向を見定めると同時に学習を正しく方向づけるための有効な予備学習として期するものである。

2. 学内オリエンテーションと学習内容の有用性について

実習への導入として実施している学内オリでの学習内容が病棟実習に役立っているか否かその有用性について問うたものを図1に示した。

「役に立った」「少し役に立った」がそれぞれ61.9%、23.8%と3分の2以上の学生がその有用性について認めている。さらに学内オリでの学習内容別にその有用性をみてみると図2の通りで、学習内容で最も有用性の高かった内容が、「受持患者の疾病や看護について」が最も高く、次いで「看護計画の立案・成文化について」「情報

表4 臨床実習の満足度

項 目		満 足 度			
		肯 定		否 定	
		強	弱	弱	強
開始前オリエンテーションでの学習	1. 実習要綱全般について学習した	4.8	78.6	16.7	0
	2. 受け持ち患者の疾患や看護について学習した	26.2	61.9	11.9	0
	3. 受け持ち患者の全体像について学習した	14.3	54.8	28.6	2.3
	4. 受け持ち患者の観察方法について学習した	19.0	64.3	16.7	0
	5. 情報の分析・問題点の抽出の方法について学習した	7.1	54.8	35.7	0
	6. 看護計画の立案の方法について学習した	11.9	57.1	26.2	4.8
	7. 看護の実施、結果の評価（検証）の方法について学習した	7.1	38.1	50.0	4.8
	8. 看護実技について学内で演習した	2.4	47.6	40.5	9.5
	9. 実習目標を中心に学習した	7.1	50.0	38.1	4.8
実 習 内 容	10. 看護計画について教員と共に学習した	21.4	54.8	23.8	0
	11. スタッフを交えてカンファレンスを行なった	31.0	59.5	9.5	0
	12. カンファレンスはあなたのその後の実習に役立ちましたか	33.3	59.5	7.1	0
	13. 婦長、医師、その他から看護上、診療上の指導を受けましたか	31.0	52.4	16.7	0
	14. 毎日の実習記録は実習に役立ちましたか	2.4	69.0	26.2	2.4
	15. 毎日の実習には目標を持って臨みましたか	4.8	45.2	50.0	0
	16. 目標に沿って毎日の実習範囲を決めたり、実習計画を立てましたか	7.2	45.2	47.6	0
	17. 反省は次の実習に役立ちましたか	19.0	73.8	7.1	0
患 者 と の 人 間 関 係	18. 患者は自分の考えを私に話してくれた	33.3	61.9	2.4	2.4
	19. 患者は自分の方から私に心の悩みを訴えてきた	14.3	64.3	16.7	4.8
	20. 看護婦も知らないような悩みをうちあげられた	31.0	45.2	19.0	4.8
	21. 患者は私の来るのを待っていた	19.0	71.4	7.1	2.4
	22. 患者の方から悩みや不安を訴えてきたとき、激励や評価をせずに黙って聴くよう努力した	26.2	61.9	11.9	0
	23. 患者の悩みを自分のもののようには感ずることができた	16.7	69.0	11.9	2.4
	24. 患者との関係の深まりを自覚した	23.8	66.7	9.5	0
	25. 患者の療養態度に変化が見られた	9.5	47.6	40.5	2.4
	26. 患者と私の相後関係から看護婦としての自分の態度を評価・考察した	16.7	66.7	14.3	2.4
	27. 患者とのコミュニケーションが難しかった	14.3	47.6	35.7	2.4
	28. 看護は患者との関係の良否によって決定されると思う	42.9	47.6	7.1	2.4

看護基礎教育における臨床実習（各論）展開に関する一考察

項 目		満 足 度			
		肯 定		否 定	
		強	弱	弱	強
看護計画の立案	29. 受け持ち患者の情報収集について	33.3	59.5	4.8	2.4
	30. 基本的欲求に属する課題ごとに観察点を把握できた	16.7	61.9	21.4	0
	31. 患者の入院生活上の規制の状況について	23.8	52.4	23.8	0
	32. 患者の家庭での生活習慣と入院中の日課について	9.5	61.9	28.6	0
	33. 病床日誌・カルテ・指示録などから患者の情報を得た	45.2	52.4	2.4	0
	34. 情報の分析・問題点の抽出について	21.4	57.1	21.4	0
	35. 観察した事項について異常点・気になる点は何か確かめた	14.3	61.9	23.8	0
	36. 集めた情報を基礎理論に照らして分析した	2.4	45.2	50.0	2.4
	37. 問題点とした理由をはっきりさせることができた	14.3	59.5	26.2	0
	38. 問題点を整理し看護計画を立てた	21.4	57.1	21.4	0
	39. 看護上問題となるものを課題毎に整理した	4.8	54.8	40.5	0
	40. 問題点に沿って看護目標を定めることができた	16.7	59.5	23.8	0
	41. 目標に沿って具体的な解決策が計画できた	9.5	69.0	21.4	0
	42. 患者の看護上の方向性（上位目標）が決定できた	4.8	71.4	23.8	0
	43. 看護計画を成文化した	2.4	69.0	28.5	0
	44. あなたの立てた看護計画は看護上有効であった	4.8	69.0	26.2	0
看護計画の実践・評価	45. ケアは患者に喜ばれた	40.5	57.1	2.4	0
	46. ケアは計画にそっていた	11.9	78.6	9.5	0
	47. 看護技術は確実にできた	7.1	50.0	42.9	0
	48. ケアは患者の安全性・安楽性を考慮して行なった	19.0	69.0	9.5	2.4
	49. 状況に応じた手順の変更・緩急順位の選択ができた	2.4	66.7	23.8	7.1
	50. 患者の反応・計画の適否について確認し、看護過程を評価した	14.3	66.7	11.9	7.1
	51. ケアの結果、良かった点・悪かった点を明らかにすると同時にその理由を明確にした	9.5	64.3	21.4	4.8
	52. ケアが不適切な場合、その修正ができた	9.5	69.0	14.3	7.1
	53. ケアが適切な場合にはより強化した	11.9	50.0	33.3	4.8
	54. 看護計画の有効性を実践との対比において確かめた	2.4	71.4	19.0	7.1
看護観	55. ケアや看護計画の良否について指導者の評価を受けることができた	23.8	59.5	11.9	4.8
	56. 実習期間を通して自分の看護観を確立することができた	11.9	73.8	9.5	4.8

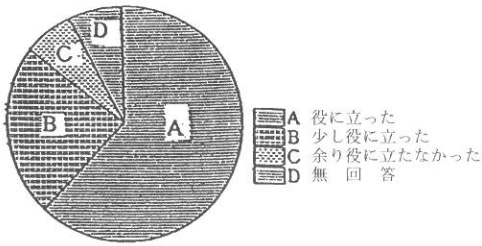
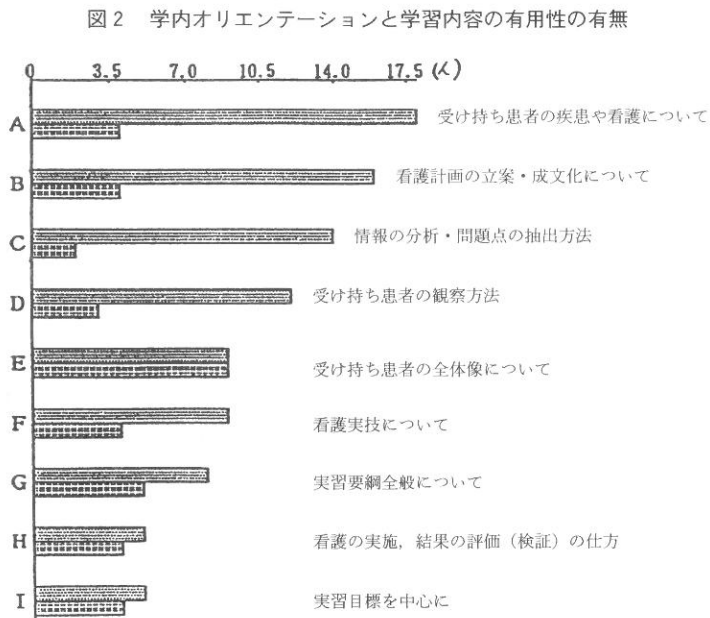


図1 学内オリエンテーション（実習への導入）の有用性について



の分析・問題点の抽出方法の順に高く、学内オリで満足度の低かった看護計画の立案及びそのための情報の分析など看護過程学習に関する部分が実践においてその有用性を認めている。これらについては、学内オリでの学習で満足度の低かった内容であったにもかかわらずその有用性が高く評価された事は、机上での学習ではなく、現場で直接反応を示す患者を対象とした学習であり、きわめて具体的に理解しやすい場面で实际的であったことから、学内オリでの学習が学生にとって喚起され、その結果効果的学習にと結びついていったのではないかと考える。一方、看護の実施、評価、検証、看護実技については、実践での有用性を認めていない。こうした学習内容で学生が示した低い満足度の中に教員の指導のあり方を反省させられるものがある。特に看護計画のうち情報の収集や分析、問題点の抽出、計画など、看護診断に類す

る内容についての学習指導は、時間をかけて丁寧に指導しているが、実践結果についての評価に関する部分の指導が希薄になっていたのかも知れない。またこの部分についての指導は、先述したように、直接反応を示す患者を対象とした学習ではなく、実践結果が实际的に反応を示さないことから学生も理解しにくい部分でもある。実践現場においても同様なことが考えられる。すなわち、看護計画の段階でのチェックは厳しく、実施、結果の評価についてのチェックはどちらかというとおざなりになっている面もある。したがって学生は、教員、指導者からの催促がなければややもすれば計画のチェックのみで実

施結果についての教員あるいは指導者の確認指導がないまま終わってしまう。その結果満足度が低く算出されているのではないかと思う。看護は評価が充分であれば行った看護の価値もわかりより一層学習の効果があがるものである。特に高い満足度を示した内容については、より一層強化するとともに低かったものについてはさらに検討を加え学習効果のあがる指導を考えていく努力が必要である。

一方、病棟実習に先立って学内オリで強化してほしい学習内容について図3に示した通りである。

実習に先立って強化してほしい学習内容として最も高かったものが「看護計画の立案・方法」「基礎看護技術」をあげていた。これらにつ

いては、本学学生が実習に出て最も苦手とする部分である。特に基礎看護技術の未熟さは看護介入を妨げる大きな因子となることは事実である。そのために常に臨床側から指摘される所以である。学生が基礎看護技術を学内で（実習開始前に）充分行う事で現場での実践学習が効果的となり、さらには、患者への対応がスムーズにかかわっていくことが出来る。又技術を反復し熟練することは、相手の反応にも目を向ける余裕ができ、常に自分の行う手順に夢中になるのではなく周囲の諸条件にも柔軟に対応できるという点ではこの強化項目としてうなづける。

### 3. 病棟での学習内容について

病棟実習中特に有効で学生の満足度の高い学習内容を見てみると「スタッフの参加によって行われた病棟でのカンファレンス」や「そのカンファレンスの結果をその

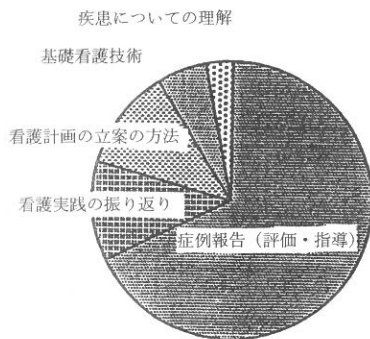
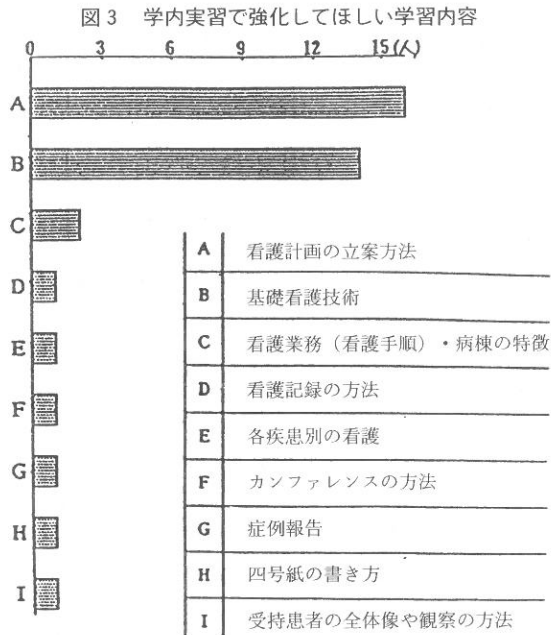


図4 学内実習（まとめ）での効果的な学習内容

後の実習に役立てられた」ことなどがそれぞれ、90.5% 92.8%で最も高率を示した。臨床実習を効果的に展開するためにカンファレンスは重要な学習方法の一つであると云われているように、臨床実習指導における重要な指導の方法でもある。何故なら、カンファレンスは、学生1人1人がもっている看護に対する漠然とした考え方やあり方をチーム間の集団思考による相互作用により、より充実した内容豊かなものにするという教育的な機能をもっていると云われる。すなわち、直接反応を示す患者を対象とし、現実には惹起している問題について病棟のスタッフの参加によって直接的で具体的な助言やアドバイ

スを広い視野から受けられ、学生は其中で看護の方向性を見いだすことが出来る。

カンファレンスは、参加者全員が共通の課題を持ちその解決のために行われ、その中では異質の経験や思考がかみ合わされることによって思考力が養われ、考える態度が自然と身につくことが期待されると云われるように学生にとって病棟でスタッフが参加して行うカンファレンスは有効な学習方法であると考えている。今後さらにこのカンファレンスを充実させ強化していく必要がある。

一方、否定的意見の高かった、すなわち満足度の低かった学習内容に「毎日の実習には目標を持って臨んだか」、「目標に沿って毎日の実習範囲を決め実習計画を立てた」がそれぞれ50%、47.6%と約半数の学生に否定的意見が表出している。臨地での学習は学生が主体的に学ぶ場であり、学生が何をどこまでのレベルまで学習するか、到達度をどこまでにするかについて学習目標を明確に持ち目標に沿って実習を展開することが重要であることは云うまでもない。しかし、この調査結果から、否定的意見が高く、学生は実習に対して自分の行動目標を明確に持たないで実習に臨み、漠然と行きあたりの実習を展開していたのではないと思われる。このことは、実習開始にあたってのオリエンテーションで、実習の目的・目標を確認するとともに理解させ、目標をもって臨むことを認識させることに我々の指導の不適さを痛感する。看護が個別性の尊重を強調するのと同じく、教育においてもまた、1人1人の学生の理解と発達に合せた個別的指導が必要であることを痛感する。さらに否定度の高かった学習内容に教員が課している実習中の記録が挙げられている。「実習中の記録は役に立たなかった。」と答えたものが、26.2%と否定度がやや高かった。実習中の学生の記録の意味は、実習の内容や方法、体験状況を記録することによってその内容を確認し、自分の看護の振り返りとして、学生の思考の整理となり学習効果をあげる一つの手段として重要な意味をもつ、さらには、学生と教員（指導者）とのコミュニケーションの道具としての性格もある。しかし、記録にも種々あり私見を述べることはさけるとしても、記録にも限度があり数多く何種類もの記録を課すことによって実践学習に支障を来したり、学生が実習中記録に追われるような記録は学習効果は勿論であるがそれと同時に実践学習の低下を来す要因ともなりかねない。臨地での学習は実践学習であることにかんがみ、実践を優先とした学習を考慮すべきであると考えているものである。

#### 4. 患者との関係学習

患者との関係学習について、その満足度を通観すると



表4の通りであるが、関係については、「患者は自分の考えを私に話してくれた」95.2%、「患者は私の来るのを待っていた」90.4%、と双方の出会いを肯定するものが多かった。さらに「患者との関係の深まりの確認」が90.5%、「看護は患者との関係の良否によって決定される」90.5%と肯定度が高かった。反面、「患者の療養態度に変化が見られた」57.1%「患者とのコミュニケーションが難しかった」が61.9%と肯定度が比較的低かったが、しかしながら患者との関係学習においては総体的に満足度が高かった。このことについて、藤原らが基礎領域の実習終了後に行った調査結果では、この部分の評価が低かったという報告をしている。基礎領域の実習時期と今回の各論実習での学生の学習進度や患者にかかわる時間的问题もあるので比較することはむずかしいが、見藤は、「看護を学ぶとは、看護技術を用いながら患者との関係のプロセスを学ぶことであり、患者との関係のプロセスを学ぶにはその時間が必要である」と述べている<sup>2)</sup>すなわち患者との関係を深めるためには人間関係技術もあるが時間もその重要な要素となる。特に患者が看護婦の援助で療養態度に変化が生じるにも時間が必要と考える。ましてや学生は、短い実習時間で患者の療養態度を変化させるまで患者とのかかわりの時間が持てたかは考えものである。しかし、調査結果から57.1%と半数以上の学生が患者の療養態度に変化があったとその間に満足を示していたことは、学生が短い実習期間に患者とのよりよい関係を結ぶための工夫や努力をしていることが伺われる。しかしながら学生は患者の療養態度の変化を見ることによって、自分が行った看護に対する評価と同時に看護への意欲を高めることにもつながると考える。一方学生は看護実習を通して、看護は患者との関係の良否によって決定するものであると、看護をするうえで患者との人間関係の重要性を認識し、さらに、臨床実習を通して学んだことの中に、患者とその家族との人間関係の大切さと難しさを強調している。単なる技術の学習なら、教室内実習でも可能であるが患者との関係プロセスは臨床でなければ学べないものであり、そこに臨地での学習の意義があり、患者との関係学習を重視した臨地での教育がその効果につながると考える。

##### 5. 看護過程の実践、展開

看護過程学習(表4参照)では情報の収集が92.8%と高い肯定度を示し、次いで情報の分析・問題点の抽出、看護計画の立案、具体的な解決策が比較的肯定するものが多かった。また情報の収集としては「病床日誌やカルテなどから」が最も多く97.6%で続いて「生活規制の状況を促えた」「生活習慣や日課について」であった。一

方、看護の実践では、ケアは患者に喜ばれた、97.1%、ケアは患者の安全性、安楽性への配慮をした、88.0%、さらにケアは計画に沿っていた、90.5%と肯定したものが多かった。しかし、「集めた情報と基礎理論との対応」が47.6%と肯定度が過半数を割り、さらには「看護上問題となるものを課題毎に整理した」59.6%、「看護技術は確実に出来た」57.1%で情報収集や問題の抽出といったアセスメントに属する部分と比べ肯定度が低く、この部分について本学学生が実習中によく臨床側から指摘されるところである。すなわち、本学の学生は、集めた情報を基礎理論と対応させ、それらを統合する能力、理論的なうらづけをするという作業が弱いところであるようである。

一方、看護実践での看護技術の確実性についても肯定度が低かったがこれらについては本学学生の特徴としてうなづける。先述した事前学習として強化してほしい学習内容に看護技術の熟練が挙げられているように、本学においては他の看護婦養成学校と比較し臨床実習の時間数が大巾に減少していることから事例に遭遇する機会が少ないことも一つの要因として考えられる。しかし学生の意見も尊重し学内で強化実施できる内容は十分な反復練習によって熟達した技術を身につけるべきである。

一方実施面では計画の段階に比し、総体的に肯定度が高く、この傾向は先に藤原らが卒業前の学生に調査した結果と同様である。

一方、看護実践結果の評価、検証については実施の部分に比べれば否定度がやや高くなっている。特に「ケアが適切な場合にはより強化した」33.3%、「状況に応じた手順の変更」23.8%、「看護計画の有効性と実践との対比を確めた」19.0%と否定度が高い項目でありこれらは評価の部分にあたるものであり、特に実施結果の評価、検証は学習の総括部分とも、云えるものであり、看護過程学習においては重要な部分である。すなわち、看護過程は、患者の健康上の問題を見極め、解決のための方法を計画して実施し評価する一連の意図的活動であると多く人が述べているように看護過程の実践学習は、アセスメントから実施・評価・検証までその全学習過程を経てよい成果をあげることが可能となる。したがって、今後、著者らが学生の実践指導に当る際、看護計画の立案に至るまでの綿密なチェックにみあうほどにその実践過程と評価についても十分な押さえが必要であることを再認識させられた。ややもすれば計画段階では丁寧に指導しておきながら実践結果についての教員によるチェックはなおざりにしがちである。「評価が十分であれば行った看護の価値もわかり、より一層学習の意味も伝えられると」



藤原は述べているように、看護の実践結果を評価することは次への看護実践につながっていくことを学生に認識させることが必要であると考えます。

#### 6. 学内実習（まとめ）での学習内容

各教科毎に行っている実習終了後のまとめでの学習内容を図4に示した。

特に有効で満足度の高かった内容は、各科毎に発表している症例報告が最も高く、次いで看護実践のふり返り、看護計画の立案、見直しと続いた。その他に実習内容の反省や情報交換による看護技術の見直しが出来た。

疑問点の解決が図れた。他の学生の意見を聞くことで看護の巾が広がったなど、実習での学習の内容、看護実践をふり返る機会と、有効な学習方法として評価する。これら学生の生の声も充分生かし今後の指導計画の中に反映させより望ましい臨床実習を考えて行くべきと考えらる。

### V. 要 約

臨床実習における学習内容について、学生の満足度から学習内容の効果を検討し今後の指導のあり方を探った。

調査内容はオリエンテーション（実習開始前学内）、病棟での学習、実践活動（患者との関係および看護過程学習）についてでありその結果を次のように要約した。

1) 学内オリエンテーションでの学習は、全体的に満足度が高く有効であると考えます。しかし一方で、看護計画のうち、情報の分析、問題点の抽出方法、看護の実践結果の評価検証の方法についての満足度が低かった。このことについては、実習開始前であること、学習の対象が生患者ではなく紙上での事例や文献などを基に、机上での学習であることなどから学生は現実と結びつけた学習には至らなかったのではないかと考える、看護計画は患者によりよい看護を提供できるように計画するものであり、そのためには、対象の状況を的確に促えて、その人らしい生活が行えるようにその人のニーズに合った看護を提供していくための計画である。そのための情報の収集は重要であり、その情報が現実のもので始めてその対象のニーズに合った計画が立案されるわけである。したがって、実習開始前でのしかもオリエンテーションでの学習としてはこの満足度に有効性を認めてしかるべきと考えます。しかし、これらの指導は実践レベルに大きく影響するものであるので現場での実習段階での適宜を得た助言や示唆が必要である。

2) 学内オリエンテーションでの学習が予備学習として、現場での看護の展開への有用性を認めるものが多く、学内オリは予備段階つまり導入としての学習として有効

であり今後もこの学習を継続していく必要があると考えます。しかし、今回のカリキュラム改正に伴って実習は臨床実習のみとしたことなどから実施するのであれば一考を要する学習である。

3) 学内オリエンテーションで強化してほしい学習内容について、「基礎看護技術」を挙げている。このことは学内オリでも満足度の低かった内容の一つであり、看護実践においては、看護技術は不可欠のものであり、またこれらの練磨は、評価と深くかかわってくることから実習前の技術的練磨がのぞまれるところである。それは単なるテクニックのみではなく理論に支えられたテクニックが「看護技術の中でより一層練磨されることをのぞみたい。これらは臨床実習（各論）直前のオリエンテーションだけでなく、それ以前からも常に学生が反復練習できる態勢を学内に準備され又、基礎看護のプログラムの中でも学習されるよう考えたいものである。

4) 病棟実習中に実施したスタッフの参加のもとでのカンファレンスは、満足度が高く、さらに、「その後の実習にも役立っている」92.8%と高率を占めていることから現場でのカンファレンスは、具体的に、直接看護に結ぶアドバイスが学生にとって有効な学習方法である。しかし臨床の現場が多忙極まる看護業務の中で学生のためのカンファレンスを持つことは仲々難しい面もあるが、学習効果という面から多忙な看護業務の中にも効果的な運営を考慮し強化していくべき努力が必要である。

### VI. お わ り に

看護基礎教育における臨床実習は、現場という流動的で「生」の患者を対象とした教育でありそうした環境の中で学生に看護を学ばせようとするとき、また学習効果を考えたとき、どのような要素がその学習の動機づけとして有効な学習方法かは一概に述べることは難しいが、その一つの方法として本学が従来から実施している病棟実習前の導入としての学内オリエンテーションは初心の学生にはその動機づけとともに有効な学習方法であると考えます。さらに、学習内容の明確化と同時に、教育の現場である臨床場の教育的配慮、教育的環境がその効果を上げる大きな要素となることは云うまでもない。平成2年度から開始された改正カリキュラムは「ゆとりのある教育」として従来より実習時間が大巾に縮小された。しかし、その時間は看護教育の総時間の34.5%を占めており、複雑な要因をもつ臨床現場で、看護を学ぶ学生は膨大なエネルギーを費やすことになる。そうした臨床地での実習を効果的で実のある学習ができるように努力していきたい。

## 引用・参考文献

1. 杉森みどり：看護教育学第2版 医学書院，1990
2. 見藤隆子：人を育てる看護教育，医学書院，1987
3. 藤原幸江他：基礎看護実習における一考察，一学習要因の相関からみた教育効果の検討一，岡山県立短期大学研究紀要，第26巻，1982
4. 中西睦子：臨床教育論，ゆりみ出版，1983
5. 西元勝子他：看護臨床指導ダイナミックス，1987，医学書院
6. 伊藤暁子：臨床実習指導の現状と課題ナースステーション，Vol.17，No.4，1987
7. 高橋百合子監修：NURSING PROCESS，看護過程へのアプローチ，学習研究社，1985

平成3年11月5日受付

平成3年11月7日受理